

匠 瑳 探 訪

藩士の墓

138年前、明治元年11月19日(当時の旧暦では、10月6日)八日市場市街地と松山村(匠瑳地区)は、突然の恐怖につつまれました。

午前10時ごろ、けが人をおかした水戸(茨城県水戸市)の藩

士数十人が福善寺(八日市場イ)にかけこみました。戊辰(ぼしん)戦争で東北地方を転戦し、最後に水戸城や藩校・弘道館(こうどうかん)で天狗党(てんぐとう)との戦いに敗れ、水戸から銚子、そして八日市場へと逃れてきました。

千人をこす天狗党はすぐさま

追いつき、松山台が決戦の舞台となりました。戦闘は2時間ほどで終わり、戦後処理を松山村と中台村が負わされ、戦死者を葬ったのが「脱走塚」と呼ばれるようになりました。翌明治2年に建てられた供養碑には、「戦死二十五人墓」とあり、この塚に葬られたのは25人でした。しかし、逃げのびて行く途中に命が絶えた藩士もいたようで、戦死者は水戸市の調べで、30名とされています。

この松山戦争は、水戸藩の戊辰戦争として幕末史の中に位置付けられ、140年近く経た今でも水戸では、その子孫が「諸生派」、「天狗派」と

語り継がれているそうです。同じ藩内で激しい抗争を繰り広げた歴史が解けるには長い時間を要するようです。

脱走塚に対し地域の人びとは、21回忌法要を1889年(明治22年)に行い、1926年(大正15年)には供養碑が水戸藩の子孫らによって建てられました。諸生党最後の地である脱走塚では、1966年(昭和41年)に水戸市と八日市場市とで「松山戦争・脱走塚百年祭」が催され、その後昭和54年夏、水戸市長が初めて供養に訪れ偕楽園の梅を植えました。

このころから水戸から供養に見えるようになり、案内するようになりました。今年もタウン誌の取材や藩士の子孫が訪ねてきました。その際、賊軍とされた諸生派藩士の子孫から「脱走塚という名称は抵抗がありますね」という話になりました。

明治維新以降の世の動きのなかで、水戸藩を脱走したとみなされた諸生党藩士の墓がそう呼ばれるようになったのでしょうか。

いつ、どのようにして「脱走塚」といわれるようになったのか、記録からはわかりませんが「水戸藩士の墓」のほうがおそらく正しいような気がします。

問八日市場図書館

☎73・3746

水戸藩諸生党藩士の墓「脱走塚(匠瑳地区中台)

